

特別養子縁組制度

さまざまな事情により、生みの親の元を離れざるを得ない子どもたちがいます。
「特別養子縁組制度」とは、親を必要とする子どもと、子どもを望む夫婦との間で、法的な親子関係を結ぶ制度です。

法改正でより身近に

2020年4月より、養子となる子どもの年齢の上限が「原則6歳未満」から「原則15歳未満」に引き上げられました。
また、特別養子縁組の成立の手続きが二段階に分かれるなど、養親となる方の負担が減りました。

特別養子縁組制度・普通養子縁組制度の違い

	養子縁組制度		里親制度(参考)
	特別養子縁組	普通養子縁組	
戸籍の表記	長男(長女)	養子(養女)	—
子どもの年齢	原則として15歳未満	制限なし (ただし、育ての親より年下であること)	原則として18歳まで (必要な場合は20歳まで)
迎え入れる親の年齢	原則として25歳以上の夫婦 (ただし、一方が25歳以上であれば、 一方は20歳以上でも良い)	20歳以上	制限なし
関係の成立	家庭裁判所が決定	育ての親と子どもの親権者の同意 (15歳以上は自分の意志で縁組ができる)	児童相談所からの委託
離縁	原則として認められない(※1)	認められる(※2)	—

※1 養子の利益のため特に必要があるときに養子、実親、検察官の請求による ※2 原則、養親及び養子の同意による

特別養子縁組の相談窓口

養子縁組あっせん事業者の一覧はこちら
ホームページへのリンクもあります



公的機関である「児童相談所」の他に、法律に定める許可を受けた民間のあっせん事業者があります。

全国の養子縁組あっせん事業者一覧 令和7年4月1日現在

事業所所在地自治体名	事業者名	電話
北海道	医療法人社団弘和会 森産科婦人科病院	0166-22-6125
茨城県	特定非営利活動法人 NPO Babyぽけっと	0120-585-931
埼玉県	医療法人きずな会 さめじまボンディングクリニック	048-526-1103
千葉県	特定非営利活動法人 ベビーブリッジ	047-405-2333
東京都	認定特定非営利活動法人 環の会	03-3951-7270
	一般社団法人 アクロスジャパン	080-3810-3838
	特定非営利活動法人 フローレンス	※
	一般社団法人 ペアホープ	042-420-6625
和歌山県	特定非営利活動法人 ミダス&ストークサポート	0736-36-5500
山口県	医療法人社団諍友会 田中病院	0834-32-2000
沖縄県	一般社団法人 おきなわ子ども未来ネットワーク	098-989-7301
札幌市	医療法人明日葉会 札幌マタニティ・ウイメンズホスピタル	011-804-7077
千葉市	社会福祉法人 生活クラブ 生活クラブ風の村ベビースマイル	043-306-2001
文京区	社会福祉法人 日本国際社会事業団	03-5840-5711
大阪市	公益社団法人 家庭養護促進協会 大阪事務所	06-6762-5239
	一般社団法人 まもりごと(特別養子縁組事業 にじのはじまり)	080-9474-5073
神戸市	公益社団法人 家庭養護促進協会 神戸事務所	078-341-5046
岡山市	一般社団法人 岡山県ベビー救済協会	086-250-2382
広島市	医療法人 河野産婦人科クリニック	082-242-1505
熊本市	医療法人聖粒会 慈恵病院	096-355-6131
	社会医療法人愛育会 福田病院 特別養子縁組部門	096-322-2995
奈良市	特定非営利活動法人 みぎわ	0743-85-5622

※二次元コードの事業者一覧にリンクのあるホームページからお問い合わせすることができます。



特別養子縁組で子どもを迎えた人、迎え入れられた人の声があります。

特別養子縁組制度についてもっと知りたい

●特別養子縁組制度ウェブサイト <https://tokubetsuyoshiengumi.jp/> (左記の二次元コードからもアクセスできます)

特別養子縁組制度に興味がある

●児童相談所相談専用ダイヤル 0120-189-783

全国児童相談所一覧

養子縁組民間あっせん事業者一覧



久保田智子さんご家族



子どもを育てたいと願う人へ 特別養子縁組制度

その願いが、子どもの幸せにつながっていく。

特別養子縁組制度とは、さまざまな事情により生みの親のもとでは
暮らせない子どもを、自分の子どもとして迎え入れる制度です。



池田さんご家族



平野さんご家族

子どもまんが
子ども家庭庁

※本事業は、里親制度等及び特別養子縁組制度等広報啓発事業として子ども家庭庁から補助を受け、朝日新聞社が実施しています。



過ごした時間と愛情が家族を育む

特別養子縁組家庭で育った養子当事者の方、実際に特別養子縁組でこどもを迎えた養親の方々の体験談をお届けします。



インタビューの全文を、特別養子縁組制度ウェブサイトで紹介しています。特別養子縁組制度について気になること、知りたいことも公開中。ぜひご覧ください。

CASE 1

こどもと真剣に向き合ううち「私が母です」と言えるようになる

久保田智子さん(姫路市教育長、元TBSアナウンサー)



特別養子縁組制度により夫婦でハナちゃん(仮名)を長女として迎え入れ、2025年春に小学1年生になりました。

20代で不妊症であること、こどもを授かることは難しいことを医師から告げられていました。社会人になって、テレビで特別養子縁組を決めた夫婦の密着ドキュメンタリーを見て、「こういう選択肢が“本当に”あるんだ」と救われた気持ちがしました。

結婚を決めることが、私にとっては大変なことでしたが、不妊治療と特別養子縁組を並列に考えられたことで、夫と「特別養子縁組がいいと思う」と話し合って結婚できました。

見えないものに対する不安というのは何にでもあると思うんです。あっせん団体から「赤ちゃんが無事生まれたので、よろしく願います」と電話をいただいたときは、「私たちで大丈夫なのかな」と夫と改めて話し合ったくらいです。

実際に対面してからは、そんな不安を感じる暇もなく、ミルクをあげておむつを替える、慌ただしい生活が始まっていました。

初めのころは「産んでいない」ことに対して、何か欠けているような感覚が少しあったと思います。いまは「はい、母です!」と言えるくらいの強さがあります。産むということは

もちろん素晴らしいこと。でも毎日の生活も同じように素晴らしくて、どんどん積み重なっていくものだと思うんです。

特別養子縁組はこどもの幸せを第一に考えた制度なので、養親候補は「どんなこどもでも迎え入れ、育てていけるか」と、覚悟を問われます。それはもちろん大前提で大切なのですが、例えばあっせん団体など支援する側が「これからも一緒にやっていきましょう」という姿勢を伝えることも大事だと思うんです。

不安の中にいる養親にとって「一人で背負うのではなくて、社会で背負っていくんですよ」という一言があれば、どれだけ心強いものか。

最初から完璧な親はいません。私自身、徐々に親になっていくと実感しているので、はじめはうまくいなくても「一人ではないんだよ」と言い続けてもらうことはとても大切なことだと思います。

娘には、2歳のころから、「『産みの母』がいるんだよ」と話をしています。ママが二人いるんだよ、という表現だと分かりにくいかなと、言葉づかいにはすごく気を付けました。

「ママはママでいるし、『産みの母』もいて、ママは『産みの母』にとても感謝しているんだよ」「ハナちゃんを私たちに託してくれたからだよ」と話しています。

ときどき思い出したように「産みの母、大好き!」と言うんです。「その人はいまだかあたたかい人」という、私たちの感覚が伝わっているというなと思っています。

「迎え入れたこどものことを愛せるかな」と思う方もいるかもしれませんが、愛情は突然100%の形で現れるものではなくて、徐々に大きくなっていく。不安というのは実際に新しい環境へ飛び込んでみるとある程度、解消されることもあり、心配はしなくてもいいのではないかと私自身は感じています。(談)

くぼた・ともこ/1977年生まれ、広島県出身。TBS報道局記者。東京外国語大学卒業後、2000年TBSに入社。アナウンサーとして『どうぶつ奇想天外』『筑紫哲也NEWS23』『報道特集』などを担当する。15年に結婚後、TBSを退社して渡米、コロンビア大学大学院にて修士号を取得。18年に帰国後、20年にジョブリターン制度を利用して、報道記者としてTBSに復帰した。

CASE 2

“血縁”がないからこそ、一緒に過ごす時間を大切にしたい

池田紀行さん、麻里奈さん

2019年に特別養子縁組で長男を迎えた、会社経営者の池田紀行さんと、不妊ピア(当事者)・カウンセラーの麻里奈さん夫妻。迎え入れる決断までの不安や葛藤、いま息子と育む時間について、話を聞きました。

麻里奈さん 制度を調べて知ったのは35歳くらいのときです。30歳から不妊治療をはじめて、この先どうなるだろうと不安があったときに「養子は考えていないの?」と言われたことがあって、「そんな選択肢が日本にもあるんだ」と知りました。40歳までは不妊治療を続けてほしいと夫に言われていましたが、その先にこんな選択肢も考えられたらいいかな、と。でも、特別養子縁組をしたい、と決めて動くまでは夫婦でいろんな葛藤がありました。30代後半で妊娠7カ月での死産を経験したことは、身体的にも精神的にもダメージが大きく、夫婦にとって大きな出来事でした。長年続けてきた



不妊治療を“お休み”しましたが、こどもとの関わりはほしかったので、ボランティア活動として、乳児院のこどもにミルクをあげたり、児童養護施設で育ったこどもたちの自立支援に携わったりしはじめました。その関わりの中で、気づいたのが「私は親になりたい」という気持ちでした。こどもを支援する活動はこれからもできるけれど、特別養子縁組では民間のあっせん団体によっては年齢のリミットもあったりする。夫に自分の気持ちを伝えていくのにもリミットがあるなと思いました。

紀行さん 妻がそんな思いをあたためていた中、僕は「夫婦二人で歩んでいけばいいや」と思っていました。変わったきっかけは、妻が子宮疾患で子宮全摘出の手術を決めたときです。その手術後、病室で手紙を渡されました。そこには、「自分で産むことはできなくなったけれど、育てたいという気持ちはなくなっていない。特別養子縁組を考えてほしい」と書かれてあり、考えが大きく変わりました。妻には、「付

き合うよ」と伝えました。大切な人がそこまで強く思っていることを、「それは知らん」と言うのなら夫婦とは言えない。妻の思いに付き合い、迎え入れるかどうかを決めるために動きはじめました。「こどもを迎え入れたい」という気持ちが芽生えたのは、思いがけない瞬間でした。検討の一環で民間のあっせん団体が行っている一泊二日の説明会兼研修会に参加したのですが、研修会中の沐浴(もくよく)体験で、実際の赤ちゃんと同じくらいの重さの人形を両手で支えながらぬるま湯に入れたとき、びっくりするくらい人形がかわいいと思えたんです。父親スイッチがいきなり入った感覚になり、すぐに申し込みのメールをしました。僕は元々、他人や環境のせいにすることが嫌な性格なのですが、それでももし、迎え入れたこどもが将来何か問題を起こしたり抱えたりしたときに、「血がつながっていない」ことを理由にしてしまうのではないかという、とてつもない怖さがありました。でも、息子を迎え入れてからこれまでの日々で、「この子と血がつながっていない」と考えたことは、一度もありません。それは、息子がかわいくて不安がだんだんとなくなっていったというのではなく、息子がうちに来た瞬間に「なくなっていた」んです。息子は、遺伝的に受け継いでいることが一切ありません。だからこそ、一緒にいる時間で、どれだけ影響を与えてあげられるかがすべて。できるだけ多くの時間を過ごす中で、いつも目を合わせて「見てあげる」ことを意識しています。また、どんなに小さくても、言葉で説明することも大切にしています。もう一つ意識していることは、いっぱい笑うことかな。一緒に笑うことを心がけながら、喜怒哀楽のある子になってほしいなど思っています。



いけだ・のりゆき/1973年生まれ。2007年、ソーシャルメディアを中核とした企業のマーケティングを支援する会社を設立し、代表取締役社長に就任。いけだ・まりな/1975年生まれ。不妊ピア・カウンセラー。約10年にわたる不妊治療期間中に、人工授精、体外受精、二度の流産、死産を経験した後、不妊を経験したピア(当事者)として相談を受ける「コウトリこころの相談室」を主宰。

CASE 3

どんなときも肯定し見守ってくれた両親 特別養子縁組で迎えられた男の子が、里親になるまで 平野隼人さん(声優)とご両親

声優の平野隼人さんは、特別養子縁組でご両親の敏彦さん・泰子さんに迎え入れられ、親子となりました。ご両親の愛情をいっぱいを受けて育った隼人さん。いまは自身がり親として、社会的養護のこどもたちを家庭に迎えています。特別養子縁組養子当事者の隼人さんと養親のご両親、お互いにどんなことを思い、隼人さんが大人になっていったのか、お話を伺いました。

敏彦さん 隼人が乳児院から我が家にやってきたのは2歳になる直前、クリスマスの季節でした。私はずっとこどもたちのサッカーの指導者をしていたのですが、周囲から「こどもがいると楽しいぞ」と言われることもありましたね。ボランティアで児童養護施設にお菓子を届けるなどしていた先輩にアドバイスをもらい、特別養子縁組を考えるようになりました。最初は特別養子縁組前提の里親として迎え入れ、最終的に裁判所の決定が下りて特別養子縁組ができたのは、6歳になる直前でした。泰子さん とても育てやすい子で、買い物に行っても駄々をこねることもなかったですね。隼人が3歳のときに、私が卵巣がんになりました。とにかく「この子を残して死ねない。なんとか頑張らなきゃ」と思い、乗り越えました。手術で卵巣を取り、こどもを産む機能はなくなりましたが、「隼人がいるから、こどもはもういなくてもいいね」と夫婦で話しました。幼稚園に入るころには退院できて、ウィッグをかぶりながら送迎していましたね。習い事も色々させました。

敏彦さん サッカーに、陸上、空手、器械体操……スポーツチャンバラもやりました。水泳は体験コースのときに最初全く水に入らなかったのですが「これはダメだな」と思ったのですが、「僕やるよ」と。学校やスイミングスクールの送り迎えは全部親がやりました。主に私が担当でしたね。

泰子さん 高校は水泳部の強い学校に推薦で入り、寮生活をしていました。水泳が忙しいのと思春期なのもあって、少し荒れたこともありましたが、自分が親とは血がつながっていないこともうすうす感じていて、でも言えないというもあつたのかなと思います。

隼人さん 血のつながりがないということはうすうす気づいていました。赤ちゃんのころ

の写真が家にないし、周りからは似ていると言われるけれど、僕自身は親と顔が似ていないと感じていましたので。成長するにつれて違和感を覚えるようになっていきました。でも僕自身はそこまで気にしていなかったの



で、そのことを両親に聞くことはなかったです。はっきりと知ったのは結婚することになったときです。戸籍謄本を両親に送ってもらって、それを見て知りました。母に電話がつながったので「お母さん、俺お母さんの子じゃないよね」と言いました。母は「うそついでごめんね」と言っていたのですが、僕は「うそだと思てないよ。育ててくれてありがとう」と。母は泣いていました。僕もさすがに泣いてしまった。「育ててくれてありがとう」と言ったのは、「血がつながっていないのに育ててくれてありがとう」という意味ではないです。普通の親子として、「いままで、育ててくれてありがとう」。そんな気持ちで伝えました。いまは僕自身も里親としてこどもを育てています。妻から「こどもを授からないかもしれない」という話を聞いたとき、「里親という選択肢もあるよ」と伝えました。僕が家で育ったように、家庭で生活を送って成長することが、こどもにとって将来の力になるのではないかと思ったのです。

ひらの・としひこ/1946年、青森県生まれ。おいらせ町議会議員。町議活動の傍ら、こどもたちへのサッカー指導も続けてきた。ひらの・やすこ/1949年、青森県生まれ。43歳のときに隼人さんを家庭に迎え入れる。ひらの・はやと/1992年、青森県生まれ。乳児院を経て、5歳で平野さんご夫婦と特別養子縁組をする。高校水泳部では、インターハイ県大会を三連覇した。20歳で声優としてデビュー。